



題字 井口 文章  
再刊 第404号  
印刷・発行  
錦城高等学校新聞委員会  
編集室 2023

みんなでつくる  
錦城高校新聞

一面…冬休みまでの錦城生の活動成果をお届け！  
ケスラ・コンラッドさんドイツに帰国  
二面…錦城高校新聞400号突破記念！  
錦城高校と錦城高校新聞の歴史を辿る

# 寒さの中で花開く努力

## 今冬に成果を上げた部活動特集

この冬も多くの錦城生が活躍した。二学期に成果を上げた錦城生たちの活躍を、日々の練習や本番の様子とともにお届けする。錦城生の一人として仲間への活躍に向けてみてはどうだろうか。

### 全国大会で認められた努力

映画研究部が、11月23日(水)に行われた第45回東京都高等学校文化祭放送部門のビデオメッセージ部門において優勝という成績を収めた。



次作に向けて真剣に作業する映画研究部の部員

形式で、三鷹市にある太宰治ゆかりの「三鷹跨線人道橋」が撤去される動きを追ったものだそう。主に2年生が制作した作品だそうで、代表者の八尋瀬成さん(2B)は「文化的価値の高いこの橋の存在を少しでも全国の人が後世に伝える手伝いをしたい」と思い、制作しました」と語る。

一方のビデオドラマ部門の作品名は「リセットゲーム」。日常生活をゲームに見立て、攻略本を使ってうまく進めたい主人公がある日その攻略本をなくしてしまうという話だ。1年生が主だって制作した作品だそうで、代表者の不破環さん(1E)は「見る人に『自分で選択すること』の重要性を伝えたくて制作しました」と話す。

今回の結果を受け、八尋さんは「何度も取材を断られたこともあり、心が折れそうになったことがありましたが、最終的に評価されて良かったです」と語る。また、不破さ



少人数で演奏するアンサンブル

### 濃い練習で掴んだ成果

12月27日(火)に府中の森芸術劇場で行われた第46回東京都高等学校アンサンブル中学生の頃のこと。親が病気で命を助けてもらったから

## あなたの献血で救える命

1月14日(土)に錦城高校近くのホームセンターで献血が行われた。献血は医療行為のため、献血を行う人は厳しい基準をクリアしている必要がある。東京都赤十字血液センタースタッフの方に献血をするために必要なことについてお話を聞くと「そのすべては献血をする人や受け取る人の安全を守るために設けられている基準です」と説明した。



指先で血液の状態をチェック

9月に開催された錦城祭では錦城高校に献血会場が設置され、多くの生徒が参加した。今回のような臨時設置の主な理由は、より生徒の身近なところに設置することで献血に参加しにくいと感じている人に少しでも多くのきっかけを作ってもらいたいからだそう。また、錦城高校の近くだと吉祥寺駅、立川駅などに献血ルームが常設されている。もし訪れる機会があったら献血に協力してみよう



初の献血に緊張した様子

実際に献血を行った矢野優姫さん(2L)に話を聞いた。矢野さんが献血に協力しようと思ったきっかけは、自身が献血を行った感想を「痛くも怖くもないので気軽に受けることができました」と話す矢野さん。最後に、献血に参加したことがない錦城生に向けて「献血は隙間時間に参加することができます。自分の血を提供することでたくさんの人の命を救うことができます」と呼びかけた。(百・榮)

コンテストで、吹奏楽部が管楽四重奏と金管八重奏で銀賞を受賞した。管楽四重奏の代表者の今村瑞季さん(2C)は「メンバーの体調不良などもあり、思うように練習できなかったのですが、舞台では金賞と言えなかった。演奏が出来たので良かったです」と大会を振り返る。銀賞を受賞できたことについて「練習中に上手くいかないところがあっても他人のせいにはせず、細かく分析してお互いに高め合ったことが勝因だと思います」と語った。

ドイツから留学生として錦城高校にきたケスラ・コンラッドさん(1F)が1月10日(火)をもって留学を終えた。コンラッドさんが帰国するにあたり、クラスではお別れ会も開かれた。お別れ会終了後は、共に半年以上過ごしたクラスメイトから温かい言葉がかけられていたほか、他クラスから会いに来て手を振る生徒や同じ部活でともに練習を伝えた。

また、ドイツでは授業を静かに受けるということが無かったため静かに勉強する点が印象的だったそう。最後に錦城生に向けて「やさしくしてくれてありがとう」と感謝を伝えた。

## 出会いの数だけ別れがある 帰国しても友達だよ

4月に錦城高校新聞で取材したときに話していた日本語はたどたどしかったが、コンラッドさんは「最初は日本語がうまくできなかったけど、日本語が分かるようになって授業も楽しくなった」とこやかに振り返る。

## 国際関係学での学びとは？

### 60回生学部説明会開催



興味のある事に取り組んでください

12月19日(月)に60回生を対象とした大学模擬講義が行われた。東京女子大学国際関係学部では「国際関係学の学びとは？」というテーマで授業を行った。韓国・朝鮮研究を事例として具体的に国際関係学ではどのようなことを学習するのかについて実際の卒業論文や資料を用いて詳しく学んだ。授業をしてくださった東京女子大学の森万佑子先生は「幅広く学びたい人や専門を絞ることができなかった人におすすめです。現代のことを扱う教科なので、これからの社会に貢献できることが学べるのが国際関係学での魅力です」と話した。(蛋)

## 春風花草香

### 新メンバーも募集中！

小学2年生から8年間書道をやっていると話す井上春花さん(1I)は、去年開催された第46回全国学生書道展に自身の作品を出品し、全書道特別大賞を受賞した。井上さんは現在5人で構成されている書道有志団体のうちの一で、有志団体を同好会にするために必要な実績を積み重ね、今回の書道展に出品したそう。

12月25日(日)、茨城県のザ・ヒロサワ・シティ会館で第33回関東地区高等学校文化連盟将棋大会が行われた。出場した水谷祐太さん(2B)は男子会長杯優勝という好成績を残した。水谷さんは大会を終えての感想を「試合中はずっと不安でした」と話す。

自分力を信じて 12月25日(日)、茨城県のザ・ヒロサワ・シティ会館で第33回関東地区高等学校文化連盟将棋大会が行われた。出場した水谷祐太さん(2B)は男子会長杯優勝という好成績を残した。水谷さんは大会を終えての感想を「試合中はずっと不安でした」と話す。



棋盤を見つめて

## むらさき草

先日、テレビの天気予報で東京では雪が降り2センチほど積もるという予報を見た。私は小学生のころ、東京で大雪が降り積もった時のことを思い出した。東京では珍しい大雪に当時私は友達と大はしゃぎし、そんな様子を見て先生が「今日は授業ができないな。遊んでいいよ」と笑顔で言い、みんな大喜びで外に出た。誰も足を踏み入れていない、きれいに積もった雪の表面を踏み、足跡をつけるのがとても楽しかった。そして先生や生徒関係なしに外に出て雪合戦をした。その頃のほうでは、雪だるまを作る友達の様子も見られ、みんな本当に、本当に楽しそうだった。しかし、中学校では雪が降り積もっても、先生は外には目もくれず授業を続ける。「えっ！どうして？」私は疑問に思っ、小学校が同じだった友達のように視線を向けたが、みんな当たり前のように授業を受けていた。担任にそのことを伝えると「中学校では雪遊びなんかするわけじゃないよ」と、さも愚問かのように返された。そんな理由になんていえないじゃないか。私はすぐ後悔してまた遊ばなかった。目の前には雪が積もった校庭が広がっているのに、遊べないほどじれったいものはない。そのころを高校の友達に話してみると「いや、小学生の時の雪遊びはとても楽しかったよね。青春だったな」と話していた。それを聞いて私は思った。確かにもう外で小学生の時のようにみんなと一緒に雪遊びをすることはできない。だが小学生という特定の期間しか許されなかったことや授業を中断して雪遊びをしたからこそ、特別感があり、また友人の心にも青春として残り続けるのではないだろうか。そう思った瞬間その思い出がほほえましく、懐かしさで胸がいっぱいになった。(歩)

## 今だけ！ぶるべー号千ヨロQがセットで買える 小平市制施行60周年記念企画

小平市では同市のコミュニティタクシー「ぶるべー号」の一日乗車券(400円)、回数券(11回1500円)を販売している。今回、市制施行60周年に合わせ、ぶるべー号の千ヨロQと小平市内の店で使えるクーポンが付いている乗車券をセットとした販売が企画され、昨年9月から実施。なお、千ヨロQ単品では600円で販売する。小平市公共交通課の鈴木成和さん、大内風輝さんにぶるべー号運行の経緯を伺うと、一部地域の交通の不便さを解消するため、自治会や商店会などの地域の人たちと検討を行い、運行開始となったそう。地域との協働でワンボックス車を用いたコミュニティタクシーの取り組みは全国でも珍しく、国土交通省から表彰されたこともあるという。大型バスでは入れない細い道も走ることができ、地域の人の生活の足になっている。現在ぶるべー号は、小平市の大沼、栄町、鈴木町の3ルートを走行している。このうち大沼ルートには錦城高校～小平駅間も含まれており、30分に1本で運行しているバスに1回1500円で乗ることができる。最後に「この機会に利用してくださいと嬉しいです。ぶるべー号を知り、乗り、魅力を探してください」とメッセージをいただいた。販売は3月末までの予定だったが、好評につき期間を延長している。(金)



リアルな再現度の千ヨロQ

# 錦城高校新聞が歩んだ400号

錦城高校新聞は、昨年の11月をもって再刊400号を迎えた。休刊、再刊など紆余曲折を経てきた錦城高校新聞の歴史。今号では、過去に発行された様々な紙面を振り返りながら、錦城の歴史とともに特集する。

## 錦城のあゆみ 錦城開校秘話



明治13年、福沢諭吉の門弟であった政治家でジャーナリストの矢野龍溪らによって錦城高等学校の前身である『三田英学校』が開校した。実学を大事にするという建学の精神のもと、

初代校舎の写真

さらに自由で緑あふれる地を求め昭和38年、小平に錦城高等学校を開校した。

阿部校長先生によると、学校が開校してからすぐにレベルの高い学校を作ることには大変で、今では考えられないような指導もあったそうだ。しかし、当時の先生方の尽力もあり時代の流れとともに良い学校へと進化していき、生徒の質も向上してきたという。(紫)

## 錦城のあゆみ 校舎の変遷をたどる



40年誌に載っている当時の校舎

数年前まで錦城高校は今の校舎ではなかった。校舎は4つで、真ん中に穴の開いた四角形の形をしていた。

阿部校長先生が言うには、現在の新校舎が建てられたのは老朽化と震災対策のためだ。2011年に東日本大震災が起こったとき、現在の新校舎になる前の古い校舎では壁が崩れたこともあったという。

また、震災が発生したとき、生徒を帰らせようとしたものの電車が止まってしまい、帰れなくなった生徒を先生が車で送り届けたそうだ。現在、学校にスマホの持込が許可されている理由の1つにはその教訓があるそうだ。(紫)

錦城高校の歴史	年月	錦城高校新聞の歴史
錦城高校開校	1963年	
	1964年	錦城高校新聞創刊号発行
共学に移行、現2号棟完成	1997年	
	2001年	錦城高校新聞再刊創刊号発行
スキー旅行節目の40回目を迎える	2003年	東京都新聞コンクール初出場
本校国語科教員による本が出版	2008年	東京都新聞コンクール東京新聞賞受賞
	2009年	全国大会初出場
現1号棟完成	2011年	
	2016年	全国大会優秀賞初獲得
	2022年	第46回全国大会出場(15年連続)
錦城高校開校60周年	2023年	第47回全国大会出場予定(16年連続)

小平に錦城が移転した翌年の1964年の12月には錦城高校新聞の創刊号が発行された。創刊号では当時の河田常吉校長先生が創刊に寄せたコメントや文化祭特集の記事が掲載された。



実際の創刊号の一面

再刊時、顧問を務めていた松井先生にお話を聞いた。松井先生は1979年から2013年まで社会科の教員として錦城に勤めていた。創刊当時は「新聞部」という名称で活動していたそうだ。記事は、担当の先生が書く内容を部員に指示し、それをも

1人で発行されていたが、部員は減少していった。時には先生本人や新聞部員以外の生徒が記事を書くこともあったようだ。ついには年に1回の発行もままならなくなつた。錦城高校新聞は1996年ごろに休刊した。(香)

## 錦城のあゆみ 錦城に吹く新たな風

平成9年、35回生が入学すると同時に錦城高校は共学へと移行した。生徒数は男子、女子共に301名ずつだった。共学にした理由を阿部校長先生に聞くと、実学を大事にするという建学の精神に男女の差はないということからだった。

男子校時代から錦城に勤めている1学年の田中彰先生は「開校以来ずっと男子校で男子生徒しか教えたことのない先生が多かったため、女子生徒の生活指導の仕方に戸惑う先生が多かったです。共学で働いている先生や男子校から共学に変わった学校の先生な

男子校時代から錦城に勤めている1学年の田中彰先生は「開校以来ずっと男子校で男子生徒しか教えたことのない先生が多かったため、女子生徒の生活指導の仕方に戸惑う先生が多かったです。共学で働いている先生や男子校から共学に変わった学校の先生な

男子校時代から錦城に勤めている1学年の田中彰先生は「開校以来ずっと男子校で男子生徒しか教えたことのない先生が多かったため、女子生徒の生活指導の仕方に戸惑う先生が多かったです。共学で働いている先生や男子校から共学に変わった学校の先生な

## 新聞発行再開への軌跡

松井先生によると、休刊から数年が経って錦城高校新聞を復活させようという動きが起きた。そして2001年12月に5、6人の有志生徒を中心に錦城高校新聞が再刊された。松井先生は、その再刊時に顧問となった。「新聞委員会」の活動形態や、紙面のスタイルもこの再刊から整っていった。

記事は当時まだ珍しかったパソコンやワープロで作成していた。写真は「写ルンです」というインスタントカメラを使って撮影。編集部に残る原本を見ると、ワープロで長い帯状の紙に文字を打ち込み、それを切り貼りして作った原本を印刷して発行していたことが分かる。再刊後、記事作成に使うパソコンは校内で寄付を募った。生徒の親や食堂の職員の方から数台のパソコンが寄せられ、それを使って記事を書くようになる。手探りで再刊の歩みを始めた錦城高校新聞委員会は、昨年11月に再刊400号を迎えた。(香)



再刊1号の紙面

## 理想の錦城を目指して

錦城高校は今年60周年を迎える。理想の学校像について阿部一郎校長先生にお話を伺った。

60周年を迎えることについて校長先生は「気が引き締まる思いです」と語る。校長先生が考える良い学校とは、ただ進学実績が良いという点だけの学校ではない。大学進学を目指す生徒を後押しすることはもちろん、また部活にも意欲がある生徒のために、部活に取り組みやすい環境を整えてあげられる学校であることを重要視しているそうだ。例えば、錦城高校に教師として戻ってきた卒業生が、錦城高校の良いところを「コースに関係なく勉強と部活に両方励むことができる」と言ってくれれば嬉しいと感じるそうだ。最後に「標を正して、これからも錦城高校が良い学校となるように努力を続けていきたいです」と意気込んだ。

錦城の未来について語る

再刊400号を迎えて今年、小平に移転して60周年を迎える錦城。移転の翌年に創刊された錦城高校新聞も、同じく約60年を歩んできました。数年間の休刊を経て、再刊から21年目の去年、再刊400号を迎えることができました。

現在、新聞委員会は15年連続で「文化部のインターハイ」と呼ばれる全国高等学校総合文化祭(以下、総文祭)に出場しています。今年の夏には鹿児島県で行われる総文祭に出場予定です。錦城生のみならず、これからの伝説を引き継いでいきたいと思います。応援よろしくお願いします。今後とも錦城高校新聞は、

大会報告、生徒会動静は次号以降にお届けいたします。また、部活の大会報告や取材してほしい内容などがありましたら、7階生徒会室までお願いします。

## 錦城卒業生が体験した大震災



大きな写真で震災の悲惨さが伝わってくる

12年が経つ東日本大震災の恐ろしさを思い出してほしいからだ。あの震災を再認識し、今後10年以内に70%の確率で起こるといわれている首都直下地震について考える機会としてくれたらうれしい。

2つ目は新聞発行の早さに驚いたからだ。被災地から震災の状態を伝えたいと思う錦城高校新聞委員会OBの方の行動で震災からわずか12日での速報号発行ということに同じ新聞委員会としてとても感動した。私も先輩の「伝えたい」という信念を見習ってこれからも錦城高校新聞を作っていきたいと思う。(月)

## 震災直後にOB寄稿で特別版

2011年3月11日、今日、再刊73号が震災特別号と多くの人の記憶に残る東日本大震災が起きた。そしてこの号には、当時宮城県仙台市に住んでいた錦城の卒業生から震災直後にOB寄稿で特別版

錦城高校新聞では、錦城生の活躍に迫った記事や個性的な特集、地元の小平をはじめとした外部取材の記事など、様々な魅力あふれる記事を発行してきた。このコーナーでは、過去の紙面からセレクトした記事をお届けする。ここで紹介する記事以外にも、紙面のバックナンバーを錦城高校ホームページで閲覧できるので、ぜひ読んでください。また、ホームページに掲載されている以前の各号は図書館で閲覧できます。

生で新聞委員会のOBが被災地の様子について書いた記事が掲載されている。紙面には被災地や避難所の様子が大きく写真とともに伝えられており、地震の惨状をありありと伝えている。記事では、地震発生から避難の過程、食料調達に至るまでの様子が説明されている。記事を書いた卒業生に感じた「常に先を読んで」行動を立てて行動すること

私がこの記事を選んだ理由は2つある。

1つは、まもなく発生から12年が経つ東日本大震災の恐ろしさを思い出してほしいからだ。あの震災を再認識し、今後10年以内に70%の確率で起こるといわれている首都直下地震について考える機会としてくれたらうれしい。

2つ目は新聞発行の早さに驚いたからだ。被災地から震災の状態を伝えたいと思う錦城高校新聞委員会OBの方の行動で震災からわずか12日での速報号発行ということに同じ新聞委員会としてとても感動した。私も先輩の「伝えたい」という信念を見習ってこれからも錦城高校新聞を作っていきたいと思う。(月)